

## 『東関紀行』における旅の造型

木下華子

はじめに

『東関紀行』は、鎌倉中期の紀行文である。序文に「仁治三年の秋、八月十日余りの比、都を出でて東へ赴くことあり」とあるため、仁治三年（一二四二）以降の成立とされる。作者は未詳、序文冒頭の「齡は百年の半ばに近づきて、鬢の霜漸くに涼し」からは五〇代に近い初老の男性、「都の辺に住るつつ、人なみなみに世に経る道になん列なれり。これすなはち、身は朝市にありて心は隱遁にある謂あり」からは、官人でありながら隱遁を志す者のイメージが浮かび上がる。そのような作者が、八月一三日に「東山のほとりなる栖」を出て近江路から東海道を下り、同二五日に鎌倉に到着、およそ二ヶ月の滞在を経て帰京の途に就くまで

の間のことを記したのが本作品である。

作者については、古来、鴨長明・源光行・同親行などの諸説があったが、現在に至るまで未詳である。その像を結ぼうとすれば序文に拠るしかないとはいえ、傍線部が慶滋保胤「池亭記」の「以<sub>二</sub>身在<sub>レ</sub>朝志在<sub>レ</sub>隱也」に基づいた表現であることは明瞭だろう。この序文が「池亭記」を取り込み、その枠組を借りながら構成されるとの先行研究の指摘<sup>〔1〕</sup>を踏まえれば、序文から想起される作者像は、それがどれほど作者の現実を反映するかという問題はさておき、仮構されたものと捉えるべきである。

夙に、今関敏子は、紀行文は作品化の過程における虚構を含んだ回想記であること、その虚構は都への回帰（望郷の念）と歌枕という伝統への参加という枠組を持ち、形式

美の整った旅の世界が創造されることを指摘した。<sup>(2)</sup> 田淵句美子も、『信生法師日記』における旅の方向性の問題——京・鎌倉間を何度も往来する信生が、作品では京から鎌倉への方向性を選び取る——が、上記の性質に由来すること<sup>(3)</sup>を論じる。

ならば、『東関紀行』における都から鎌倉への旅もまた、実体験に基づきながら、何らかの枠組を基盤に造型された<sup>(4)</sup>と考えるのが自然だろう。また、この時、旅する主体である「私」は、作者そのものというよりも、上述の序文にあるような性質を纏って仮構されたものとなるはずだ（以下、作中に仮構された主体という意味で「私」を用いる）。本稿では、このような観点から、『東関紀行』における「私」とその旅がいかに造型されたかを考えてみたい。

### 一、序文における自己規定

改めて、序文に注目してみよう。以下は、冒頭から旅行の出来に至るまでの叙述である。

齢は百年の半ばに近づきて、鬢の霜漸くに涼しいへども、なすことなくして、いたづらに明かし暮すのみにあらず、さしていつこに住み果つべしとも思ひ定めぬ有様なれば、<sup>ア</sup>かの白樂天の「身は浮雲に似たり、

首は霜に似たり」と書き給へる、あはれに思ひ合はせらる。もとより金帳七葉の栄えを好まず、<sup>イ</sup>ただ陶潜五柳の栖を求む。しかはあれど、<sup>ウ</sup>深山の奥の柴の庵までもしばしば思ひやすらふほどなれば、なまじひに都のほとりに住ひつつ、人なみなみに、世に経る道になん列なれり。これすなはち、<sup>エ</sup>身は朝市にありて心は隠遁にある謂あり。かかるほどに、思はぬ外に、仁治三年の秋八月十日余りのころ、都を出でて東へ赴くことあり。

五〇歳に近く頭髮も白くなった私は、なすべきこともなく無為に月日を送るのみならず（傍線部）、一生の住み処とする場所も定まっていない（二重傍線部）。その有様は、白居易が言う「浮雲のように住むべき場所も定まらぬまま白頭となった」老爺を思わせる（点線部了）。引用された漢詩は、『白氏文集』巻一八の「送蕭処士遊黔南」の一節「能文好<sup>レ</sup>飲老蕭郎 身似<sup>二</sup>浮雲鬢似<sup>一</sup>霜」であり、村上天皇が大江河朝綱と菅原文時に選ばせた『白氏文集』第一の詩としても著名である（古今著聞集・文学・一〇九）。住み処を定められぬ無為の徒としてのみならず、文人としての私を想起させる仕掛けと考えられるだろうか。その私は、華々しい栄耀を好むことはなく、官を辞して隠逸の生活の中で詩

作を行った陶淵明(五柳先生)の境地にあこがれるものの(点線部イ)、深山の奥に草庵を結んでの遁世まではためらわれ(点線部ウ)、俗世間に身を置いて仕官しながら、隠遁を志す状態にある(点線部エ)。

すでに井手敦子が指摘するが、<sup>(4)</sup>ここから読み取れるのは、慶滋保胤「池亭記」に典型的な「中隠」(官職や地位にありながら隠者の心を持つ)にある文人として私が造型されることである。なお、傍線部ウが「いづくにも生まれずはただ住まであらん柴の庵のしばしなる世に」(新古今集・雑下・一七八〇・西行)を援用することを思えば、<sup>(5)</sup>ここには、「住み果つべ」き場所がなければ安住の住み処など求めない徹底した遁世者とは異なる私の姿勢が端的に示されたいと見てよい。

さらに、井手は、傍線部が示す内容に着目し、安息する住み処を持たぬ疎外感を有した隠者の人物が東国へ下るというあり方に、「伊勢物語」「東下り」の段に連なる、伝統的な旅の文学の型」を見出し、序文が旅の文学として方向付けられることを指摘した。

『伊勢物語』東下り関連章段の影響は、『東関紀行』に先行する『信生法師日記』(元仁二年(一二二五)の旅)にも濃厚であることが、田淵句美子によって論じられている。<sup>(6)</sup>

また、歌枕については、三河国八橋に代表されるよう、東下りを本意・本説とする中世の和歌や言説は枚挙に暇が無い。<sup>(7)</sup>序文における人物造型が東へ下る昔男を彷彿させるという井手の見解は、首肯すべきものだろう。

周知のことだが、『伊勢物語』東下り関連章段のうち、第七・八・九段の冒頭を確認しておく。

・昔、男ありけり。京にありわびて東に行きけるに、(第七段)

・昔、男ありけり。京やすみ憂かりけむ、東の方にゆきて住み所求むとて、(第八段)

・昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらず、東の方に住むべき国求めにとて行きけり。(第九段)

第六段「芥河」は男が恋慕する女を盗み出すも奪い返されるところという結末に至り、続く第七段から東国へと漂泊する男の逸話が連続する。第七・八・九段は全て、男の東下りの理由を京に住みづらくなつたこと(傍線部)として語り、さらに第八・九段では、東国に住むべき場所を求めた(二重傍線部)という要素が付加される。

『東関紀行』序文では、東国へ赴く理由は「思はぬ外」のこととされており、二重傍線部の要素は見出せない。し

かし、作品末尾、帰洛が決定する直前の箇所には以下の記述が見える。

文にも暗く武にも欠けて、つゝに住み果つべきよすがもなき数ならぬ身なれば、日を経るままにただ都のみぞ恋しき。

私は、学問・武芸いずれの能力もなく、鎌倉で一生を終えられるようなつてもない我が身を嘆き、日に日に望郷の念を強めている。二重傍線部は明らかに序文のそれと呼応しており、この旅の目的の一端は「住み果つべき」地を鎌倉に求めるものだったことが理解されよう（作者の現実引き戻すならば、鎌倉での就職が想定できようか）。

また、道中、三河国八橋では「在原の業平が杜若の歌詠みたりけるに、みな人かれいゐの上に涙おとしける所よ」と思い出して詠歌し、駿河国宇津山では、「蕪かづらはしげりて、昔の跡たえ」ぬ様子に、「業平が修行者にことづてしけん程、いづくなるらむと見行く」私が叙述されている。つまり、『伊勢物語』東下り関連章段における昔男と私のあり方は、第九段を中心として各所で明らかに重なりを見せるのであり、その性質は作中において一貫性を持つと考えてよい。先に見た中隠の姿勢と東下りの昔男のイメージによって、序文における私が造型されたことになろう。

なお、このような主体のあり方は、先行の紀行文と必ずしも一致するわけではない。同じく東海道を下って鎌倉に赴く『海道記』（貞応二年（一二三三）以降の成立）において、作中の私は「出家ノ身」「遁世ノ道」と称する遁世者として設定され、その旅は「斗數」すなわち仏道修行であった。また、作品についても、「鞆中ノ景趣」を記したのではなく「存外ノ浅キ狂言」「愚懐ノ為」のものだとし、自らを修行の記と規定する。<sup>(8)</sup>『信生法師日記』は、「思ひ定むべき所もあるべからずとあくがるる心に誘われて」東へ赴くため、『伊勢物語』東下り関連章段からの影響が窺われるが、その旅は「東の方修行」のためのものである。

ここまでの二作品が出家者としての修行の記であったことに対し、『東関紀行』は、私が都から「鎌倉に下し着きし間」の「目に立つ所々、心とまる節々」を「をのづから後の形見にもなれ」と「書き置」くものだと記す。主体の造型のあり方は『信生法師日記』に共通しながらも、作品としての位置付けは東下りの旅の記として、東海道を下る先行紀行文とは異なる位相にあると言えよう。本節では、序文における中隠・東下りの昔男としての私の造型、旅の記としての言説空間の構築に、『東関紀行』の特徴を見出せることを指摘しておく。

## 二、流離する「私」

続いて、作中におけるいくつかの地点での叙述を分析し、序文に見た自己規定の展開を検討しよう。

### (一) 近江国武佐寺・美濃国杭瀬川

まず、都を出立した日の夜、近江国武佐寺の記事である。

A 行暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。

まばらなる床のあたり、秋風夜更くるままに身にしみ  
て、ア都をいつしか引きかへたる心地す。オ枕に近き

鐘の声、暁の空につづれて、彼の遺愛寺の辺の草の  
庵の寢覚もかくや有けむとアあはれなるうちにも、行  
く末遠き旅の空思ひ続けられて、いといたうイものが  
なし。

イ都出でて幾日もあらぬ今宵だにかたしキわび  
ぬ床の秋風

最初の宿泊地となった琵琶湖東岸の武佐寺で、私は寢床  
(歌枕「鳥籠山」が響く)に吹き込む秋風を身に染みて感じ、  
早くも都とは異なる心持ちとなった(傍線部ア)。暁方の寢  
覚めに寺の鐘の音を聞きながら、『和漢朗詠集』(山家)に  
収められる白居易の「香炉峰下新下山居草堂初成偶題東壁  
詩」(白氏文集・卷一六)の一節、「遺愛寺鐘歇枕聴 香鑪峰

雪撥簾看」を思い起こし、彼が経験しただろう遺愛寺近  
くの寓居の寢覚めに自らの現在を重ねて(点線部オ)、感慨  
にふける(波線部ア)。そして、前途遙かな旅路を思い、も  
の悲しさ(波線部イ)を感じながら、「都を出て幾日も経な  
い今宵でさえ(傍線部イ)、鳥籠の山の秋風が身に染みて、  
袖を片敷きかねるこの寢床よ(波線部ウ)」と旅寝のつらさ  
を詠むのであった。

初日の投宿において強調されるのは、都からの距離感(傍  
線部)と旅愁(波線部)であることに注意したい。『海道記』  
が最初の「旅臥」となった大岳で「彼廬山ノ草庵ノ夜雨」  
を想起したように、香炉峰下の寓居が旅寝の心情の媒とな  
ることは珍しいことではない。しかし、『海道記』が「旅臥」  
「旅寝」の「哀」を「イツシカ家ヲ出ルシルシ」として出  
家者の自覚・矜持へと転換するのに対し、『東関紀行』の  
「あはれ」は「ものがなし」「わびぬ」と同趣の反復となっ  
て旅のつらさ・悲しさの強調へと向かう。点線部オから波  
線部イへと展開する本場面の表現を支えるのは先の詩句を  
本説とする「暁と黄楊の枕をそばだてて聞くもかなしき鐘  
の音かな」(長秋詠藻・述懐百首・一八二/新古今集・雑下・一  
八〇九)だと思われるが、このような「あはれ」に「かなし」  
き述懐をもたらすものは傍線部に表現される都との距離感

だと理解できよう。

続いて、旅程三日目となった八月一日、美濃国杭瀬川での宿泊である。

B 杭瀬川といふ所に泊りて、夜更くる程に川ばたに立ち出でて見れば、秋の最中の晴の空、清き川瀬にうつろひて、照る月なみも数見ゆばかり澄みわたり、カニ千里の外の古人の心思ひやられて、エ旅の思ひいとどをさへがたくおほゆれば、月の影に筆を染めつつ、「ウ華洛を出て三日、株川に宿して一宵、しばしば幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ、かつがつ遠情を前途一千里の雲にをくる」など、ある家の障子に書きつくる  
次に、

知らざりきエ秋の半ばの今宵しもかかる旅寝の月  
を見むとは

中秋の名月の八月十五夜、河畔に出た私は、源順の「水の面に照る月なみを数ふれば今宵ぞ秋の最中なりける」(拾遺集・秋・一七二)のごとくに清らかな河波を照らす澄んだ月光を眺めつつ、白居易の著名な詩句「三五夜中新月色、二千里外故人心」(和漢朗詠集・十五夜)に自らの心情に重ね(点線部カ)、旅情を堪えることができない(波線部エ)。私は、その思いを宿泊した家の障子に書き付け、「秋の半ば、

八月十五夜たる今夜に、このような旅寝の有様で月を見ようとは思ひもしなかった」と慨歎する。

先のA武佐寺に続き、白居易の詩句の一節を媒介して私の心情が叙述される場面である。ここでも、都を出て三日(傍線部ウ)、都で見るとべき中秋の名月を旅寝の月として見ることへの驚き(傍線部エ)という表現に明らかのように、都からの距離感とそれに由来する嘆きが「旅の思ひいとどをさへがたく」(波線部エ)という状況を導いている。本来の「八月十五夜禁中独直对月憶元九诗」(白氏文集・卷一四)は、左遷されて遠方にある元慎を都の白居易が思うものだが、当該場面では、旅路にある私にとっての「二千里の外」は「華洛」たる都、「古人」は都の知己となろう。原典よりも、この詩句を享受する『源氏物語』須磨巻のあり方——  
——に倣うものである。

ところで、Aに引用された詩句は白居易が江州司馬に左遷された折のものだが、日本でも、何らかの不本意な事態のために都を離れた人々の心情の表出に多く用いられていた。「大鏡」は、大宰府に流された菅原道真の「都府楼纒看瓦色 観音寺只聴鐘声」を、「文集の、白居易の「遺愛寺鐘欵枕聴 香鑪峰雪撥簾看」といふ詩にまささまに作

らしめ給へりとこそ、昔の博士ども申しけれ」と記す。また、須磨における光源氏も、秋のある日、「独り目を覚まして、枕をそばだてて四方の嵐を聞」くことになる。Bの引用が先述した『源氏物語』須磨巻のあり方に基づいていることと合わせれば、『東関紀行』は、私の心情の叙述に際して引用した詩句の本意を、あるべき都を離れて流離する姿に求めていると理解できるのではないだろうか。

## (二) 三河国八橋

(一) で検討した都との距離感、及び都から流離する私の旅愁は、序文における私の造型（東下りの昔男）と強く関連するものになるはずだ。以下、紀行文において東下りの影響が最も濃くなる三河国八橋で確認してみよう。

C 行き行きて三河国八橋のわたりを見れば、キ在原の業平が杜若の歌詠みたりけるに、みな人か<sup>キ</sup>れい<sup>キ</sup>のの上に涙おとしける所よと思ひ出でられて、そのあたりを見れども、かの草とおぼしき物はなくて、稲のみぞ多く見ゆる。

花故に落ちし涙の形見とや稲葉の露を残し置くらむ

『東関紀行』は、『伊勢物語』第九段の半ば、「行き行きて駿河国に至りぬ」を援用し、私が八橋にたどり着いたと記

す。そこで、私が思い出すのは、業平の一行が沢のほとりで乾飯を食した折、かきつばたを折句に男が和歌を詠み、「みな人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり」となった一節である（点線部キ）。しかし、私の眼前の景は業平のそれとは異なり、稲ばかりが広がっているのだった。『伊勢物語』の昔と私の今が対比され、私は、稲葉に置く露をかつての業平の涙の形見とみる。

ところで、本文中の「杜若の歌」とは、「キからころも着つなれにしつましあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」であり、都に残した妻への思いと遙かに隔たった都を思う旅愁が一首の眼目となる。つまり、『東関紀行』の私は、八橋において、都を思い涙する昔男（業平）を想起したことになる。ならば、当該場面における『伊勢物語』引用の本意は、望郷の念にあると読み取れる。

他の紀行文においても、八橋での叙述はほぼ『伊勢物語』第九段を援用するが、その本意は必ずしも都への思い・望郷にあるわけではない。『海道記』では、「水二立ル杜若」「クモデニ物思フ人」「住ミワビテ過グル」等、「身をえうなきものに思ひなし」た昔男や「水ゆく河のくもで」なる八橋、沢に咲く「かきつばた」という『伊勢物語』第九段の象徴的な表現を撰取する。しかし、『海道記』の当該場面は、他

に長柄の橋の橋柱や「蒙求」「相如題柱」など橋にまつわる著名な古典を複層的に引用して構成され、最終的には、「住ミワビテ過グル三川ノ八橋ヲ心ユキテモ立チカヘラバヤ」と、目的を達して帰京する折に再度渡橋したいという将来への意志が表出される<sup>10</sup>。

また、『信生法師日記』では、「八橋を過ぐとて、沢のほとりなる木に書き付け侍る。杜若世々を久しく隔てても昔の跡の色ぞ残れる」と記す。眼前の杜若の花に『伊勢物語』の「昔の跡」を思うもので、特に望郷の念を喚起する叙述にはなっていない。後代のものだが、『十六夜日記』は、「八橋にとどまらむと人々いふ。暗きに橋も見えずなりぬ。ささがにの蜘蛛手危ふき八橋を夕暮れかけて渡りかねつる」と記す。これは、「水行く河のくもでなれば」（伊勢物語・九段）や「うち渡し長き心は八橋の蜘蛛手に思ふことは絶えせじ」（後撰集・恋一・五七〇・読人不知）のごとく、八橋が分岐する景への着目だろう。ここにも、都を恋しく思うという要素は見出せない。

つまり、『東関紀行』の特徴は、八橋の叙述に際し、『伊勢物語』第九段のうち、都に住み侘び東へと下る昔男（業平）の旅愁——都との距離感・望郷の念——が最も際立つ箇所を撰取したことにありと考えられる。このような撰取のあ

り方は、(一)に見た白居易の詩句の引用と軌を一にしよう。そして、これらの方法は、序文における私の造型を一層強め、都から流離する者のイメージを推し進めるものではないか<sup>11</sup>。

### (三) 小括

ここまでの検討をまとめると、以下のようになる。『東関紀行』は、序文において、中隠・東下りの昔男としての私を造型したが、その造型は、いくつかの地点での叙述を経て、あるべき場所としての都から流離する者の像をより一層強める展開を示す。イメージの醸成に寄与するのは、都からの距離感を示す表現（傍線部）と広く共有される白居易の詩句や『伊勢物語』の引用（点線部）であり、その本意は日本における詩句の享受から形成されたものであった。そのような叙述の中で、都から流離する私の心情は「あはれ」「かなし」といった「旅の思ひ」（波線部）すなわち望郷の念による旅愁という形で作中に定位されたと考えられよう。

『東関紀行』は、鎌倉到着後も、「旅店の都に異なる、やうかはりて心すごし」と鎌倉に対する違和感と寂しさを表出し、滞在中も「日を経るままにただ都のみぞ恋し」くて「帰るべき」時機を待つも「むなしく過ぎ行」く有り様だ

つたと記す。その望郷の思いは、「蘇武が漢を別れし十九年の旅のうれへ」「李陵が胡に入りし三千里の道の思ひ」に喩えられるつらさであった。はからずも帰京が叶うことになった「故郷に帰るよろこび」は、「朱買臣にあひ似たる心地」だったと言う。

このような鎌倉における私の視線と心情は、例えば『海道記』の叙述とは一線を画している。

申ノ斜ニ、湯井浜ニオチツキヌ。暫休テ此処ヲミレバ、数百艘ノ船ドモ、繩ヲクサリテ、大津ノ浦ニ似タリ。千万字ノ宅、軒ヲ双テ、大淀渡ニ異ナラズ。

湯井浜(由比ヶ浜)に多くの舟が停泊する様子を「大津浦」、家々が軒を並べる様子を「大淀渡」に類似するものとして見出している(傍線部)。大津浦は琵琶湖岸の港、大淀渡は諸説あるが、繁栄の様を表す表現から、木津川・宇治川・桂川が合流する山城国淀の渡のことと考えておきたい<sup>12)</sup>。つまり、『海道記』は鎌倉を叙述するに際し、都とその周辺の地名を引き合いに出して、それに「似」て「異ナラ」ぬもの、同質のものとして理解しようとする視線を有することになる。これに比べると、『東関紀行』は、あくまでも鎌倉の異質さに着目し、それを受容できない私を明らかにするものだと言えるだろうか。繰り返し表出される都への思い

は、鎌倉への違和感と表裏一体の感情だろう。

つまり、『東関紀行』における視線や姿勢は、紀行文の持つ都への回帰(望郷の念)の枠組の内にあるとはいえ、その全てに共通する性質とまで言えるわけではない。おそらくは、序文以降に展開してきた私のあり方と深く関わるものだろう。『伊勢物語』東下りの昔男によって造型され、あるべき場所たる都から流離する私が、鎌倉に対する違和感と都への望郷の念を抱き続けるわけである。私の造型と引用を媒とした心情の表出を思えば、このような展開は、作品において必然的なものだったと考えられるだろう。

### 三、羈旅歌の詠歌史

ここまで、『東関紀行』における私の造型とその展開を分析・考察してきた。本節では、このような主体仮構のあり方が何に基づくのか、その背景について検討したい。

実際に東国へ下る者が『伊勢物語』東下りを踏まえた形で叙述を行う事例として夙に指摘されるのは、藤原教長である<sup>13)</sup>。崇徳院の近臣であった教長は、保元元年(一一五六)、保元の乱で院に従ったことよって常陸国浮島に配流され、応保二年(一一六二)に帰洛した。その折の詠が、『教長集』に収められている。

ことにあたりて東の方にまかりけるに、大いなる川のほとりに行きて日も暮れ方に、渡守はや渡らなむと急がせば、いとものがなしくて舟に乗らんとするに、この川をば何とか名付くると問ふに、これなむ隅田川といふは、昔在中将のいざ言問はむ都鳥と詠みけむを思ひ出でられて、来し方行く末のあはれなること限りなくて詠める

・隅田川今も流れはありながらまた都鳥あとだにもなし  
(八二五)

大意は以下のようになろう。保元の乱に關わつた罪を受けて東へ下ると、大河のほとりで夕暮れ方、渡し守が早く渡つてほしいと急かす。ひどくもの悲しい思いで舟に乗ろうとし、川の名を問うとこれが隅田川だと答える。昔、在中将が「いざこととはむ都鳥」と詠んだことを思い出し、来し方行く末の限らない感慨を、「隅田川は変わらずに今も流れているが、在中将の昔、この地にいた都鳥はその跡すらも見えない」と詠んだ。

詞書は『伊勢物語』第九段をそのまま踏まえる書きぶりだが、一首の眼目は「在中将」の「昔」と教長の「今」の落差にある。隅田川に都鳥がないという下句は、都を思い起こす術もないほどに遠く流離してしまつた教長の嘆き

と旅愁を導くものだろう。『伊勢物語』を踏まえ、時にはそれを反転させて自らの「今」を叙述するあり方は、第二節で見た『東関紀行』三河国八橋と同趣である。

自らの現実に東下りを踏まえるものとしては、わずかに、和泉国下向時の和泉式部詠「言問はばありのまにまに都鳥みやこのことを我に聞かせよ」(後拾遺集・羈旅・五〇九和泉式部集・六七二)があるが、場所は異なっている。ただし、勅撰集歌であるため、東下りを自らの実情を表現する媒体に用いる前例としては十分に機能しよう。教長の方法は、この勅撰集歌を前例としながらも、むしろ題詠としての羈旅歌に学んだものではなからうか。題詠では、『堀河百首』別部の「今日はさは丘ち別るとも頼りあらばありやなしやの情け忘るな」(一四七五・国信/金葉集・別・三四四)が『伊勢物語』九段を撰取する前例として挙げられるが、ここでは、教長自身も参加した崇徳院主催の『久安百首』(康治年間(一一四二〜四三)下題、久安六年(一一五〇)詠進)における羈旅歌(五首)を見てみよう。

野本瑠美の研究に詳しいが、<sup>15)</sup> 応制百首史における部立百首の端緒となつた『久安百首』において、羈旅歌は雑部の中でも重要な位置を占めていた。崇徳院は旅の辛苦・俊成(顕広)は都への距離感と望郷の思いで四首をまとめて

五首目で旅を総括する、教長は四季と恋で旅の状況に変化をもたらずなど、工夫を凝らした詠出が行われ、それぞれの内容が重複せぬよう、相談や調整が行われた可能性も高い。また、『久安百首』以前の勅撰集では、必ずしも羈旅部は存在せず、離別部に比して歌数も少ない。しかし、『久安百首』後の『統詞花集』や『千載集』といった勅撰集（またはそれを目指した撰集）において、羈旅部の歌数が離別部を上回るようになり、この傾向は『新古今集』以降に継承される。<sup>⑮</sup>『統詞花集』の撰者・藤原清輔と『千載集』の撰者・藤原俊成が『久安百首』の歌人であったことから見ても、このような転換点に位置し、その後の展開に大きな影響を与えたのは、多様な題詠の羈旅歌を詠ませた『久安百首』だったと考えられる。

ここで、俊成と清輔の詠を見よう。俊成の五首は先述の通り、都への思いでまとめられる四首と無常観による旅の総括一首という構成だが、その四首目に次の和歌がある。

・わが思ふ人に見せばやもろともすみだがはらの夕暮れ  
の空（八九七）

大意は「私の愛しい人に見せたいものだ。ともに住む、この隅田河原の夕暮れの空を」というところで、本歌は「心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春の景色を」（後

拾遺集・春上・四三・能因）と「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（伊勢物語・九段）である。作中主体は東下りの昔男を思わせ、「もろともにすみ」（「住み」と「隅」田の掛詞）によつて、「思ふ人」を呼び寄せとともに暮らしたいと願う男の心情が掘り下げられている。<sup>⑯</sup>

清輔の五首は四季と雑だが、五首目に『伊勢物語』第九段を本説とする和歌を詠じる。

・旅づともたるかれないひのほろほろと涙ぞおつる都思へば（九九九）

こちらは、「旅包（旅の携行品）に持っている乾飯がほろほろと落ちるように、ほろほろと涙がこぼれ落ちてしまう。都を思うと」の意であり、第九段のうち、八橋の杜若詠の場面における「みな人、かれないひの上に涙おとしてほとびにけり」を想起させる。こちらも作中主体は昔男をなぞらえるものであり、一首の眼目は都への望郷の念にある。

管見の限り、『久安百首』以前に題詠・実情詠ともに東下りを撰取または揺曳する羈旅歌は、先の和泉式部詠と国信詠以外はほぼ見出せない。<sup>⑰</sup>教長詠における『久安百首』羈旅歌の影響は、積極的に考えてよいのではなからうか。

紙幅の関係上、詳細は別稿を期すが、この後、題詠の羈

旅歌における『伊勢物語』東下りの本歌・本説取りは、治承年間の数首を経て、文治・建久年間に九条家や御子左家の歌人たちの間で共有され、新古今時代に流行するといふ見取り図を描くことができる。

治承三年（一一七九）の『右大臣家歌合』「旅」題では、頼政が「都へは今もことづけやるべきに宇津の山辺にあふことぞなき」（二十四番右、四八）と詠み、俊成は、「右、宇津の山辺にといへる、ことによそへんとなけれども、彼、宇津の山辺のうつつにもといへる歌を思へる心宜しくこそおぼえ侍れ。：（中略）：右はことなる言葉なくて心旅の歌とおぼえたり。勝と申し侍るべし」と判じた。頼政詠は、旅人たる作中主体が「都への言付けを送ろうとしても、あの東下りの昔のように宇津の山辺で知己に会うこともなく、（現実でも夢でも）あなたに逢えない」と嘆くもので、判に言うように『伊勢物語』第九段の「駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」を本歌とする。判詞は、この本歌取りを好ましく、また、各別な言葉を用いずとも旅の歌の内容を満たす（傍線部）として頼政詠を勝とした。このような俊成の評価は、鞆旅歌における東下りの本歌・本説取りを後押したのではなからうか。<sup>20</sup>

この後、文治・建久年間になると、九条家歌人では、慈

円の「早率露胆百首」（一一八八年）における「旅恋」題の一首、「時しもあれ隅田河原の都鳥昔の人の心知れとや」（拾玉集・七七八）、良経・慈円の「南海漁夫北山樵客歌合」（一一九五～九六年）鞆旅七四番の「忘れずは都の夢や送るらん月は雲居を宇津の山越」（一八五二・慈円）「眺めつる空行く月の行く末に思ひも出でよ宇津の山寺」（一八五三・良経）などが挙げられる。また、御子左家歌人では、「御室五十首」<sup>21</sup>「旅」題において、定家が「旅衣きなれの山の嶺の雲重なる夜半を慕ふ夢かな」（五四四）、家隆が「宇津の山月だにもらぬ蔦の庵に夢路絶えたる風の音かな」（五九九）と詠む。

新古今時代に入ると、『正治初度百首』（一二〇〇年）の「鞆旅」題五首においては二三人中五名が『伊勢物語』東下り関連章段からの本歌・本説取りを行い、同年の『正治後度百首』<sup>22</sup>「山路」題五首では一人中五名が『伊勢物語』第九段の「宇津の山」を詠み込む。建仁二年（一二〇二）の「三体和歌」<sup>23</sup>「旅」題では、「旅衣きつつなれゆく月やあらぬ春や都と霞む夜の空」（六・後鳥羽院）や「旅寝する夢路は許せ宇津の山関とはきけどもる人はなし」（三〇・家隆）の詠を見ることができるとともに、名所歌・地名詠への注目もこの傾向を強めるものとして機能した。承元元年（一二〇七）

の『最勝四天王院障子和歌』では「宇津山」一〇首中八首、「富士」同六首、「武蔵野」同三首、建保三年（一二二五）の『内裏名所百首』に至っては、「角田川」で二首中一〇首もの詠が東下りを本歌・本説とする。<sup>(22)</sup>

『東関紀行』成立に近い時期もこのような傾向は維持されており、例えば宝治二年（一二四八）の『宝治百首』「旅行」題一首では、四〇人中五人が東下りに寄せた形で隅田川や宇津山を詠じている。<sup>(23)</sup>

粗描ではあるが、題詠としての羈旅歌や名所歌における『伊勢物語』東下り関連章段の本歌・本説取りは、『久安百首』の羈旅歌に梶子とし、新古今時代に至って羈旅歌の本意としての地位を確立、その後も継承されたと理解することが可能だろう。実情詠が東下りを本歌・本説とするあり方は、先の教長詠の他、俊恵の「又、東の方へまかり侍りし人の許へよみて送り侍りし、三首」／都鳥見えん渡は思ひ出でよありやなしやの情けばかりを「林葉集・別・九九四」や、「御つかひに鎌倉へ下る」雅経の「八橋にて／都思ふほどはくもでに乱れつつ袖こそぬるれ沼の八橋」（明日香井集・雑・一五一六）を見出せるものの、多いわけではない。題詠に倣う形で実情詠における東下りの撰取が行われたと考えるべきだろう。

ならば、『東関紀行』のような紀行文における主体の仮構、東下りの昔男としての私の造型もまた、これらの和歌、特に題詠としての羈旅歌の詠歌史に基づくものとの想定が可能である。第一節で確認したように、東下りの昔男に基づく私の造型と旅の記としての自己規定は、必ずしも紀行文一般のものではない。羈旅歌の本意として『伊勢物語』東下りが位置付けられてきた詠歌史を考えれば、『東関紀行』における「旅の記」としての枠組は、必然的に東下りの昔男による私の造型をもたらしたと考えられる。あるいは、そのような主体の仮構が「旅の記」としての自己規定をもたらしただけでなく、このような性質を持つ紀行文は、現存するものを見る限り、『東関紀行』以前には見出せない。『海道記』や『信生法師日記』は出家者の「修行の記」として自らを位置付けていたが、和歌を伴う修行の記は平安時代から存在し、継承されてきたものである。<sup>(24)</sup> このような文学史の流れを鑑みると、都から流離する主体の「旅の記」を創り上げた『東関紀行』は、紀行文における一つの画期として捉え得るのではないだろうか。

### 終わりに

以上、本稿では、『東関紀行』について、旅する主体とし

ての私の仮構と作品の自己規定を出発点とし、旅の展開とそこに表出される心情や認識のあり方を、引用される詩句や『伊勢物語』東下り関連章段との関係から分析・考察した。また、そのような作品を成立させる背景として、羈旅歌の詠歌史を考えたいと思う。

外村南都子は、鎌倉時代後半に成立する早歌の旅の表現が、『伊勢物語』東下りや『源氏物語』須磨・明石巻の旅を本意とすることを論じたが、本稿で検討した『東関紀行』のあり方は、韻文のみならず、散文においてもそのような本意の形成を受けて作品が生成し、さらに後代へと受け継がれることを示していようか。『東関紀行』における如上的特徴は、中世における旅の表現が何を本意とし、何を目指すのかということと深く関わっているのである。

### 【注】

- (1) 井手敦子「『東関紀行』序文の一考察」(『古典遺産』四二号、一九九二年三月)。
- (2) 「旅」の表現と虚構」(『中世文学』三九号、一九九四年六月)。
- (3) 「『信生法師日記』『信生法師集』の成立と執筆意図」(『中世初期歌人の研究』、笠間書院、二〇〇一年。初出は一九九七年八月)。

(4) 井手前掲論文(注1)は、『東関紀行』の作者は、序文を『池亭記』を模すことによって構成し、『池亭記』的な隠者像、隠遁思考の知的文人達の姿と重なりと指摘する。

(5) 新日本古典文学大系『中世日記紀行集』、新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』ともに指摘する。

(6) 田淵前掲論文(注3)。

(7) 歌枕としての「八橋」の表現と『伊勢物語』第九段の關係については、李英敬「中世紀日本文学と歌枕」(『日本文学研究』三七号、二〇〇二年九月)、谷知子「歌枕「八橋」と「鳴海」」(『日本文学研究ジャーナル』二二号、二〇一七年六月)などに詳しい。

(8) 木下「『海道記』の叙述方法」(『国語と国文学』九九―八号、二〇二二年八月刊行予定)にて考察を行っている。

(9) 木下前掲論文(注8)。

(10) 木下前掲論文(注8)。

(11) 旅の終盤、相模国箱根湯本で強い望郷の念が表出された箇所も注意される。「この山をも越え下りて、湯本といふ所にとまりたれば、太山嵐はげしくうち時雨れて、谷川みなぎりまさる。岩瀬の波高くむせび、暢臥房の夜の間にも過ぎたり。かの源氏の物語の歌に「涙もよほす滝の音かな」といへる、思ひよせられてあはれなり。それならぬ頼みはな

きを故郷の夢路ゆるさぬ滝の音かな」。強い深山嵐と時雨に谷川が増水し、激しい波音に眠ることもできない私は、『白氏文集』「香山避暑詩」の「暢師房」（香山寺の文暢の僧房）の有様を思うと同時に、『源氏物語』若紫巻における北山の僧都と源氏の対面の場面、「暁方になりければ、法華三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくると尊く、滝の音に響きあひたり。吹き迷ふ深山おろしに夢さめて、涙もよほす滝の音かな」を想起し、「他に願うことはないのに、故郷の夢を見ることさえ許さない激しい滝の音」と歎息する。引用場面は、夕顔の死後、瘧病にかかった光源氏が北山にあった時のものであり、不本意なことが起こってあるべき都を離れた状況と考えられる。

- (12) 山城国淀の渡（新日本古典文学大系）他、伊勢国大淀（新編日本古典文学全集）等の説がある。伊勢国の場合、歌枕「大淀の浦」詠は、「大淀のみそぎ幾夜になりぬらん神さびにたる浦の姫松」（拾遺集・神楽・五九四・兼澄）他、『最勝四天王院障子百首』「大淀の浦」一〇首、『内裏名所百首』「大淀の浦」一二首などがあるが、繁栄をイメージさせる歌は見出せない。

- (13) 今関前掲論文（注2）。

- (14) 『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）の「教

長」の項目（黒田彰子執筆条）。

- (15) 『中世百首歌の生成』第一篇第二章「久安百首の羈旅歌」（若草書房、二〇一九年。初出は二〇〇九年一月）。

- (16) 勅撰集においては、『拾遺集』『金葉集』『詞花集』は羈旅（または旅）部を持たず、離別部の末尾に少数の歌を収める。「新編国歌大観」所収のもので八代集と『統詞花集』を確認すると、『古今集』は離別四一・羈旅一六、『後撰集』は離別四六・羈旅一八と離別部が多い。『後拾遺集』では別も羈旅も三九で同数、『金葉集』『詞花集』は羈旅部を有しない。『統詞花集』に至って別二七・旅四〇と歌数が逆転し、『千載集』も離別二二・羈旅四七である。『新古今集』では離別三九・羈旅九四となり、羈旅歌が大きく伸長、一三代集では『新勅撰集』『統後撰集』『統拾遺集』『玉葉集』『続千載集』『風雅集』が離別部を欠き、「羈旅」部の冒頭部分に少数を収めるのみとなる。安田徳子「旅歌の変遷」（『中世和歌研究』、和泉書院、一九九八年）を参照。

- (17) 野本前掲論文（注15）。

- (18) 「すみだがはら」は、「まつち山夕越えゆきて廬崎の角太河原に一人かも寝む」（万葉集・巻三・二九八）のごとく、そもそもは紀伊国紀ノ川の河原を指す。しかし、当該歌は、初二句の「わが思ふ人」の語から『伊勢物語』の本歌取りで

あり、武蔵国と下総国の境をなす隅田川の河原だと理解でき。なお、『八雲御抄』では万葉歌も含めて「下総」とする。

(19)

離別歌に範圍を拡げても同様。なお、正保版歌仙家集本『貫之集』の「陸奥国へ下る人を惜しめる／から衣する名に負へる富士の山こえん人こそかねて惜しけれ」(七二七)があるが、陽明文庫本では初句は「狩衣」であり、二句目の「摺る」(「駿」河が響く)への詞続きからは「狩衣」が適当と考えられ、東下りを揺曳させるのは難しい。『相模集』の「とひわたる人もやあると人しれずまつにおとせぬ都鳥かな」(初事歌群・五六四)は第九段の撰取だが、雑歌である。また、東海道を下る旅程を収める『増基法師集』『赤染衛門集』『能因法師集』、東国を経て奥州へ下る旅程を収める『為仲集』には、東下りの要素は見られない。『堀河百首』(一一〇五～一〇六)は「旅恋」「旅」題を設定するが、こちらにも東下りを揺曳するものは見出せない。先述の「別」題に国信の一首が見える。『江帥集』に「雁がねの都の方へ行かませば我が思ふことを問はましものを」(一六六)があるが、都鳥ではなく「雁がね」を詠むため、本歌・本説としての要素は弱い。『撰政左大臣家歌合』(一一二六年八月)「旅宿雁」題で、「限りありて急ぎ立ちぬる庵の内に誰をたのむの雁しらふらん」(一・俊頼)、「武蔵野に旅寝する夜の寂しきにた

のむの雁の鳴くぞうれしき」(二・定信)が詠まれるが、「たのむの雁」は『伊勢物語』を離れても歌語として成立する。武蔵野の旅寝を詠む定信詠は、『伊勢物語』第一〇段を本説とする可能性が高いが、判詞は「たのむの雁とはただ雁の名と思ひて詠みたるにや。これは田面の雁と申すことなり。武蔵野は田あるべしとも聞こえぬ野なれば、僻事とも申すべからん」とし、武蔵「野」と「田」のむの雁の取り合わせを非難する。『伊勢物語』撰取については、同時代、共有されていないと理解される。

(20)

治承年間までに自撰されたと思われる『林下集』には、「旅の歌として／我が背子が上かたらなん都鳥さこそ昔の人もとひけれ」(三四九)が載る。

(21)

『御室五十首』では、生蓮も「都鳥恋しき上は語らねど名を睦まじみきくと知らずや」(旅・八〇二)と詠む。

(22)

『新編国歌大観』の歌番号で示すと、『正治初度百首』は六八六・慈円、七八四・忠良、八八五・隆房、一四八七・家隆、一七八八・生蓮。『正治後度百首』は二七三・雅経、六七四・長明、七七二・季保、九七一・宮内卿、一〇七一・慈円。『最勝四天王院障子和歌』では「宇津山」が三五二・後鳥羽院、三五二・慈円、三五四・俊成卿女、三五五・有家、三五七・家隆、三五八・雅経、三五九・具親、三六〇・秀能、「富士」

が三八三・通光、三八五・有家、三八六・定家、三八七・

家隆、三八八・雅経、三八九・具親、「武蔵野」が三九二・

慈円、三九四・俊成卿女、三九八・雅経。『内裏名所百首』は、

一一四二・行意、一一四三・定家、一一四四・家衡、一一

四五・俊成卿女、一一四六・兵衛内侍、一一四八・忠定、

一一四九・知家、一一五〇・範宗、一一五一・行能、一一

五二・康光。

(23) 三七五八・後嵯峨院、三七六〇・実氏、三七六五・為家、

三七七八・禅信、三七九七・下野。

(24) 木下「道程を叙述する文体」(『西行学』八号、二〇一七年

八月)。

(25) 「早歌の旅の表現」(『国文白百合』三四号、二〇〇三年三月)。

本文の引用は以下の通り。『東関紀行』『海道記』 〓新日本古典文

学大系『中世日記紀行集』、『信生法師日記』『十六夜日記』 〓新編

日本古典文学全集『中世日記紀行集』、『伊勢物語』 〓新編日本古

典文学全集『竹取物語』 伊勢物語 大和物語 平中物語。和歌

は特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。なお、注に提示し

た論文は、紙幅の関係上、副題を省略した。

